
リトル・クエスト

teddy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトル・クエスト

【Nコード】

N4739Y

【作者名】

teddy

【あらすじ】

剣と魔法のこの世界で、僕は旅をしている。その理由は今のところ秘密だ。それは後々明らかになっていくだろう。僕自身、そう信じている。／これから語るのは、僕の旅の記録だ。僕が出会った人々、文化、事件について記していく。その先に何があるか、僕はまだ知らない。居心地の良い場所があればいいと思う。冬に雪がたっぷり積もるところがいい。……そう考えると、これは雪国を目指す物語といえるかもしれない。

テイク・オン・マーク 1

東の街に魔物が出たらしい。

現れたのは、木工品が得意な小さな街だ。住人は百人を少し越える程度で、街全体が大きな家族のような街だった。ぼくも訪れたところがあるが、その温かさに、つい長居してしまった覚えがある。また来てくれ、また来るよ、そう挨拶を交わし合って、僕はその街を後にした。

その三日後が今日だ。そして魔物が出たのは、今朝のことらしかった。

身体中傷だらけの中年男性は、宿屋に飛び込んでくるなり、そう叫んだ。

男が宿屋に駆け込んで来た時、僕は本を読んでいた。

自分の部屋でベッドに横たわり、仰向けになって、ページをめくっていた。

その本は、旅の途中、出会った行商人と交換したものだ。そこに書いてある文字は、僕のまだ知らない国のものらしく、読むことはできなかった。だから僕は、それを画集の一つとして考えていた。眺めることは日課の一つだった。意味が分からなくても、そうして長い間触れていれば、伝わってくるものがあるのでは、と思っていたのだ。そう信じたくなるほどに、縦書きという書体と丸みを帯びた文字の並びには、魔術的な魅力が宿って見えた。

僕はその本を気に入っていた。交換の対価として僕があげた方位磁針は、今頃、行商人と共にらくだの背中で揺れているはずだ。

本から目を離して、僕は煤けた色の天井を眺めた。そこに、まだ

見たことの無い砂漠を思い描いてみる。僕の一時の友人は、元気にしているだろうか。あの退屈そうならくだの蹄は、砂を踏んでいるのだろうか。僕は、口の中で祈りの言葉を呟いて、彼の旅が安全であることを望んだ。本に再び目を向ける。

扉が叩かれた。ノックが2つ。

「はい」と返事をすれば、薄い扉は錆びついた泣き声を上げて内側に開いた。

「よう、聞いてたか」

大男は、首を曲げて入ってきた。扉が彼には小さ過ぎるのだ。彼はまた、筋肉でいっぱい肩を左右片方ずつ順番に、入れる。そうして、難儀の末に、彼は僕の部屋に身体を収めることが出来る。

「無理しなくていいのに。呼ばれば僕の方から出て行っただぜ」と笑ってしまった。

彼は馬の頭みたいに大きな手を振る。強い風が起きる。

「いいんだよ。こういうのは礼儀だ。――ちょっと、お願いことがある」

「お願いごと？ 金なら貸さない。僕だって、かつかつだ」

「金じゃない。金じゃない」

と大男は肩をすくめて見せた。

僕は少し驚いた。いや、もしかすると“大分”かもしれない。僕らのように、こうして旅を続けている人間にとっても、変わらず大切なのがお金だった。旅の装備も屋根も食事も、お金があつてこそそのものだ。

宿屋に限らず、僕ら冒険者同士の間では、こういつて話がよく持ちかけられる。お金が無い。だから貸してくれ。明日は我が身だと思つて好意を見せれば、つけ込まれる。それを避ける為に証文を交わす――それは有効な手段と言うことはできない。僕らにとって、一番大切なのは自分自身だ。約束は、その後に続く。

大男――名前をベアルトオツソと言つたが――とは、かれこれ知り合つて三日経つ。彼の方が早くこの宿屋についていた。件の行商

人が、共通の友人であることも手伝って、僕らは親しくなったのだ。彼が何をしている人間なのか、僕は知らない。しかし、僕らは互いの出自を知らなくても、それなりに仲良くやっていくことができるのだ。

そして、彼の正体が何者であれ、金が必要になるのは別段不思議なことではない。心構えは常にしてあった。

しかし、それだけに、彼の“金じゃない”発言は、僕を戸惑わせることになる。

「じゃなんなのさ？」と訊ねた。

「そこでさっきの“よう、聞いてたか”が効いてくるわけだ」と彼は大きな両手を合わせる。部屋の壁が揺れる。

「どういうこと……」

「今さっき、この宿屋に一人の男が来た」

「ああ、さっきのー」と僕は、宿屋の入り口方面でなにやらざわついてたのを思い出す。興味無かったのだが、事態の方は僕を放っておいてくれないらしい。

「それで？」

「その男の街にな、魔物が出たらしいんだ」

「魔物」

「そうだ。魔物だ。これは大変なことだぜ」

「そうかな。魔物が現れること自体は良くあることなんじゃない？統計学的にはさ」

「へっ、この本の虫が」^{レビスモ}と彼はバカにしたように笑う。「本を読んでいる癖に想像力つてもんが欠けてやがる。もっと頭を使えよ。いいか、これはチャンスなんだ」

一息に彼はそう言って、頑丈な微笑みを浮かべて見せる。

「何をするつもりなんだ？」

「名を上げるんだよ」と彼は子どものような調子である。「魔物退治に行くんだ」

僕は少しの間彼を眺めて、そこに複雑なものが無いことを見て取

った。彼は純粹にわくわくしていた。冒険心が彼を落ち着かなくさせていた。

僕は本を閉じて言った。

「面白そうだな。詳しい話を聞かせてくれ」

「そこなくちな！」と大男は言った。丸太のような腕が空気を割いて、法螺貝に似た音を立てた。

テイク・オン・マーク 2

大男のプランは単純なものだった。

魔物が現れたという東の街に出向き、魔物を倒す。

「ー以上!」と声を張り上げた彼は、満足した表情で、宿屋のロビーに集まっている僕らに視線を配った。

「何か質問があるか? その余地は無いと思うけどな」

僕らは大男を含めて、全部で五人いた。全て宿屋の客で、大男が一人ずつ声をかけたらしい。即席の魔物討伐隊。その内の2人は、つい先程宿屋に到着したばかりの若者だった。赤毛と栗毛。もう一人は丁度出発しようとしていた所の優男で、彼は学者風の格好だったから、こういうばか騒ぎに参加していることに、僕は驚きを隠せないでいる。

昨日の昼、偶々話をした時、彼は自分がある男を探しているのだと言っていた。

その学者が手を挙げた。

「魔物側の戦力はどんなものなんですか」と彼は言った。

大男はソファで心配そうに見守っている、東の街の男を見やる。

彼は首を左右に振った。気が動転していたとかで、正確な数が分からないのだそうだった。

「というわけだ。分からん!」と大男。

「だがなんとかなるだろう!」

「その根拠ってどこから来るんですかあ」と赤毛が言った。

「そうそう、全然無えよな、根拠」と栗毛が笑いを重ねる。

若者はどこまでいっても若者だな、と僕は思う。そして数年前――僕がまだ故郷にいた頃を思い出した。あの頃の僕も、こうして友人と笑い合っていただろうか。

記憶は不鮮明である。冷たい水の底みたいだ。

僕はそれ以上過去を覗くのを止めにして、大男を見る。

「あのなあ、お前ら。冒険だよ、冒険。ぶっつけ本番でいいじゃないか」

「しかし作戦の一つくらいあっても……」と学者。

「作戦ならあるさ」

「なんすかあ」「なんすかね」

「“当たって砕ける”、だ！」

大男はまたも満足そうな表情である。学者は肩を落とす。僕は、いよいよ彼が見切りをつけて、その場を去るだろうと思った。それが当然だと。

しかし、彼はそうしなかった。眼鏡を外して、レンズを吹きながら溜息混じりに言う。

「ま、いいでしょう。いいですよ、そんな感じでも」

「え、いいの」と口を開いたのは僕だ。

僕が口をきけることに驚いたように、彼らが僕を見た。

「僕だつて一応、旅はしてきて長いですからね……」と学者は言った。「行き当たりばったりはそうも変わらないでしょう。――ああ、ただ」とここで、彼は大男を見る。

「命の危険があれば、僕は逃げますよ」

若者の顔つきがにわかには真剣味を増して、大男に向けられた。

「それは当然だ」と大男は頷く。

「俺たちとお前らは、赤の他人だからな。自分のことだけを考えればいいよ」

「それをきいて安心しましたよ」と学者。

「だが、最後に残ってた奴らだけが、栄光つてのを手にする。それだけは、心に留めといてくれ」

僕らは頷いた。

ファースト・コンタクト 1

僕らの宿屋から、東の街まではそんなに遠くない。馬に乗って半時間ほど行ったところにある。

騎乗の僕らは腰に剣を携えて、無言のまま、風の中をかきわけていく。もうすぐ冬が来るのだろう、少し寂しげな匂いが、鼻孔の奥をくすぐる。僕は何度かくしゃみをする。そしてその度に少しずつ嬉しくなっていく。冬が近い。その実感が、風と向き合う度深まっていっていくからだ。

東の街についた。僕が以前も訪れたことのある街。その時と異なつて、今は不穏な空気の下に沈んでいた。僕は空を見上げる。陽は高い。それにも関わらず、夜中のような静けさがあった。僕らは馬から下りた。

何もー誰もいないようだった。辺りはシンと、している。

「魔物いないっすね」「いないねえ」

と2人の若者が言つて、剣の柄に手をかけながら、街の入り口にある門をくぐった。その後ろに大男、この街から来た男、学者、僕と続いた。

大男は包帯で右腕を吊るしている男に訊ねる。

「ここにいたのかよ」と落胆を隠していなかった。「嘘だったら面白くないぜ」

しかし、男は答えなかった。彼は震えている。身体中に汗が噴き出していて、顔面は蒼白だった。学者はその様子を覗き込むようにする。若者たちは、どんどん前に進んでいく。

石造りの建物は、道を真っ直ぐ伸ばしていた。こんなにくたびれた壁だったろうか。僕は指の腹で撫でながら、仲間たちの後ろについていく。壁の表面は脆くなっていて、さらさらと崩れていった。

砂を固めたみたいだった。あるいは砂糖菓子。

道の先には、噴水を真ん中にした広場があるはずだった。大男の影となつて、見えないが、若者たちはそちらに向かつているのだろう。重なる声は元気に離れていつて、やがて止まった。

数秒間、僕から見えない空白があつた。事態は前後左右見境無しに動き出した。

まず大男が前方に駆け出した。

傷を負つた男は僕の方——つまり後ろを向いて——走り出す。

学者は呆然としていた。

ほどなく若者の内の一人から、叫び声が聞こえてきた。悲鳴だ。途方に暮れていた僕の視界は、だんだん開けていく。僕も走り出した。腰の剣の柄に手をかけて、抜いた刀身を地面に向けながら、足を前に出す。これを振り上げる機会が無ければいいんだけど、と僕は思う。しかし、この希望が叶えられたことは今まで一度も無い。

広場が開けた。倒れている若者が2人。一人は円い肩を抱いていて、その指の間からは、彼を流れるものが零れていた。だくだくととめどなく。彼の相方——赤毛の方は、地面にうつ伏せになっていた。上半身はそうだ。少し離れたところでは下半身が空を向いていた。彼の赤毛は地面に染み込んでいて、区別がつかない。石畳の地面は拒むように、彼の赤毛を浮かせたままにいる。

何があつたんだ、と訊ねたのは誰だったのか、よく覚えていない。状況は単純で、混乱しているのは僕らの方だった。僕らは現状を認める手段を探して——こう言つてよければ責任の所在を求めて——そして、噴水の縁に腰掛けている一人に目を留めた。

僕は剣の柄を強く握り締めた。指の骨が碎けるように強く。しかし力を込めれば込めるほど、震えは大きくなって、身体中に伝わっていった。

僕の膝は狂つたように笑っている。目だけが静かだった。

僕の見ている風景——呆けたような青空、白亜の噴水、石畳と砂

糖菓子のような建物たち。そしてその真ん中で、光を集めて編み込んだように――その空間に結ばれている、少女。
――彼女が、そうだ。僕は呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4739y/>

リトル・クエスト

2011年11月14日03時22分発行